

## 顎口腔領域における蜂窩織炎の臨床的検討

菅野勝也 浜田智弘 高橋進也  
金 秀樹 高田 訓 大野 敬

### The Clinical Statistical Examination of Cellulitis of Oral and Maxillofacial Regions

Katsuya KANNO, Tomohiro HAMADA, Sinya TAKAHASHI  
Hideki KON, Satoshi TAKADA and Takashi OHNO

Although the cellulitis in the oral and maxillofacial regions is frequently observed, but there are few detailed reports of its clinical statistical examination. We examined the cellulitis of 372 patients who visited our department between April, 2000 to March, 2005. The results of the statistical examination were as follows. The patients' average age was 39.2 years old and the cellulitis occurred most commonly in 20-50 year-old men. The apical periodontitis of the mandibular molars was the most common cause of a cellulitis in our cause. It occurred many in May and March while it occurred least frequently in June and December. The average length of the treatment period for inflammation was 8.4 days.

Key words : cellulitis, oral and maxillofacial region, treatment period

#### 緒 言

顎口腔領域の蜂窩織炎の多くは、歯や歯周組織の炎症が原因となり急速に波及するため、迅速かつ適切な病態の把握と治療方針の決定が必要となる。しかし、その原因や治療について臨床統計学的に詳細に検討された報告は少ない。今回著者らは、当科で治療を行った蜂窩織炎症例について検討を行ったので報告する。

#### 検 索 対 象

対象は2000年4月から2005年3月までの5年間に於いて、当科で治療を行った顎口腔領域の蜂窩織炎372例とした。

#### 検 索 項 目

1. 年齢, 男女比
2. 原因疾患
3. 原因歯
4. 発症時期
5. 処置方法
6. 処置期間
7. 原因の処置

#### 結 果

1. 年齢, 男女比 (図1)  
平均年齢は39.2歳, 最少年齢が3歳で, 最高年齢は85歳であった。年齢別では20歳から50歳代に多く, 全体の約77%を占めていた。男女比は,

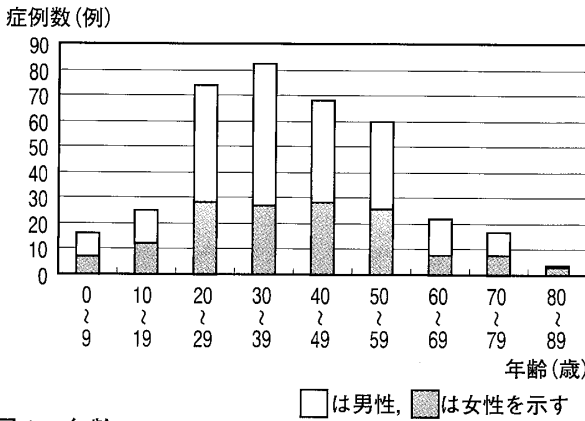


図1 年齢

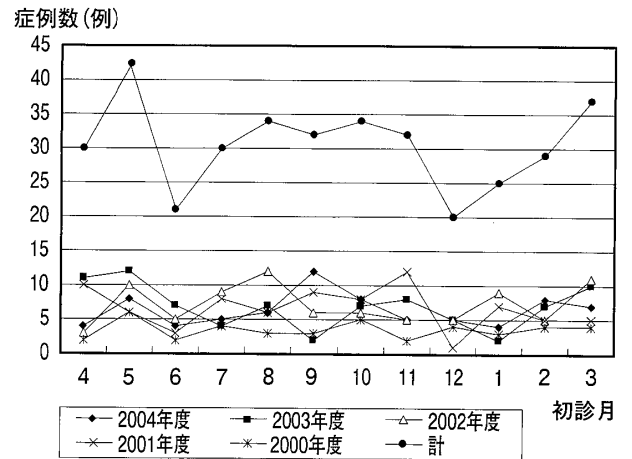


図4 発症時期

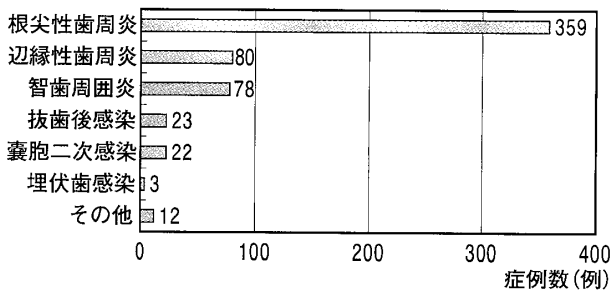


図2 原因疾患

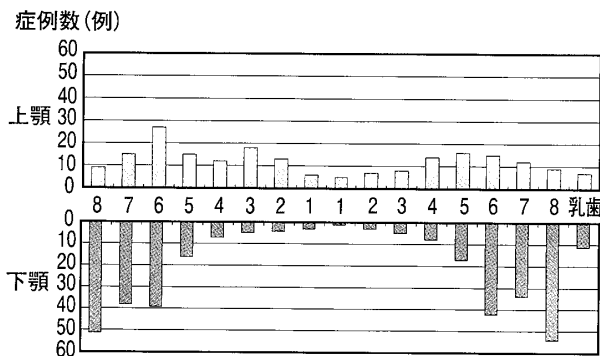


図3 原因歯

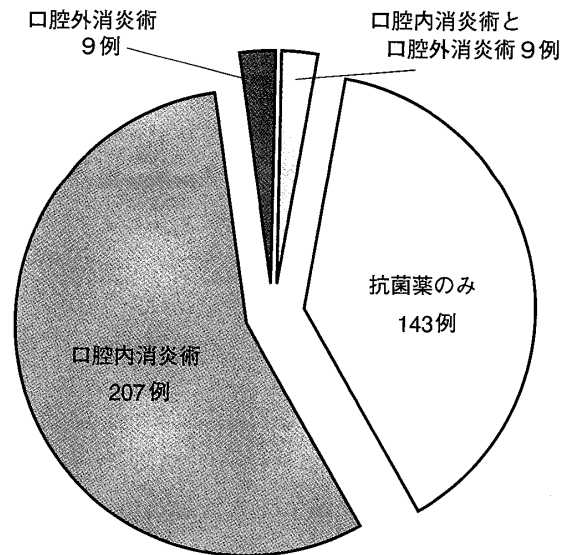


図5 消炎方法

男性221例，女性151例であり，およそ3：2で，男性に多い傾向であった。

2. 原因疾患 (図2)

重複して発症した疾患はそれぞれを原因疾患として検索した。その結果，根尖性歯周炎が359例62.2%と最も多かった。その他の原因疾患にはインプラント周囲炎，唾石，異物肉芽腫などがみられた。

3. 原因歯 (図3)

菌性感染症が原因であった症例の原因歯546歯の分布を検索した。その結果，上顎208例，下顎

338例と下顎に多かった。上顎では小白歯から第一大臼歯にかけて，下顎では大臼歯に多く，特に智歯を原因とする症例が31%と最も多かった。

4. 発症時期 (図4)

各月別の症例数を検索した結果，5月と3月に多く，6月と12月に少ない傾向がみられ，各年ともに同様の傾向がみられた。

5. 処置方法 (図5)

処置は①抗菌薬投与のみ，②抗菌薬投与と口腔内消炎術，③抗菌薬投与と口腔外消炎術，④抗菌薬投与と口腔内・口腔外消炎術の4つに分類し検索した。口腔内消炎術を施行した症例が最も多く，207例55.6%であった。次いで抗菌薬投与のみが

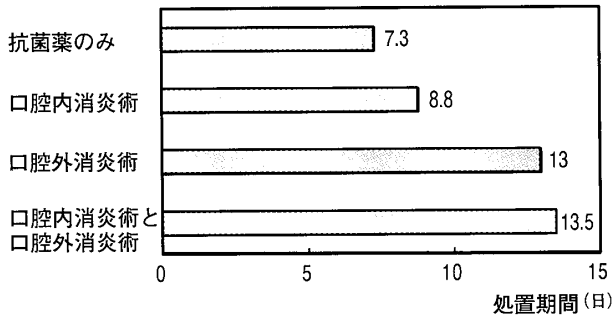


図6 処置期間

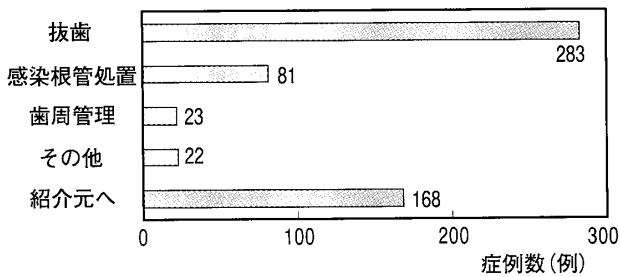


図7 原因の処置

143例38.4%であった。なお、372例中287例 (77.1%) に静脈内投与を行い、81例 (22.9%) は経口投与であった。

## 6. 処置期間 (図6)

各症例における平均処置期間を処置別に検索した。処置期間は抗菌薬の投与期間とした。全体の処置期間は平均8.4日、最短処置期間は1日、最長処置期間は46日間であった。

処置期間に関して、症例数の多かった処置、①抗菌薬のみの症例と②抗菌薬と口腔内消炎術を施行した症例の2群について比較するとCRPの値に関係なく、処置期間は①が短かった。

## 7. 原因の処置 (図7)

消炎後に施行した原因の処置は、原因歯の抜去が283例 (49%) で最も多かった。消炎後紹介元医療機関へ治療を依頼した症例が168例 (29%) であった。

## 考 察

発症年齢および性差は他の報告でも、30歳代、男性に多い傾向があった<sup>1-3)</sup>。蜂窩織炎の発症年齢は原因の大半を占める歯牙の萌出に伴い増加し、歯牙の喪失に伴い減少していると考えられる。

原因疾患はほとんどが菌性感染症で、根尖性歯

周炎が全体の約6割を占めていた。1症例に対して、複数の歯牙が根尖性歯周炎に罹患し原因歯となっている症例もみられた。次いで多かった辺縁性歯周炎や智歯周囲炎が原因となったのは、それぞれ根尖性歯周炎の4分の1程度であった。

下顎大臼歯部に原因歯が多い傾向は他の報告と同様であった<sup>1,3)</sup>。

発症時期は特定の月に有意な差が認められた。地域性や社会的背景などが関係していると思われる。今後も検討が必要と考えられる。

蜂窩織炎に対する処置は口腔内消炎術が約半分の症例で選択され最も多かったが、抗菌薬使用のみで消炎できた症例も3割以上あり、抗菌薬の治療効果の高さが伺えた。

処置期間に関して、今回の検索の中で最長期間は46日であった。この症例は骨髄炎を併発しており、長期にわたり抗菌薬の経口投与を行っていたためであった。口腔外消炎術は重篤な症例で施行されており、そのため処置期間が長いと考えられた。

膿瘍形成や、感染の急速な進行を予防するためになど、症例により消炎術の施行は必要不可欠であるが、今回の検索では消炎術の有無は消炎期間の短縮には寄与しないと示唆された。またCRPの値でも今回の検索では処置期間に差はなかった。

## 結 語

2000年4月から2005年3月までの5年間に、当科で治療を行った顎口腔領域の蜂窩織炎372例について検討し、以下のような結果を得た。

1. 20～50歳代の男性に好発する傾向があった。
2. 原因は下顎大臼歯の根尖性歯周炎が最も多かった。
3. 発症時期では5月と3月に多く、6月と12月に少なかった。
4. 平均消炎期間は8.4日間であった。

## 文 献

- 1) 村越祐子, 福永秀一, 小貫満義, 坂詰和彦ほか: 口腔外切開を要し, 入院加療を行った膿瘍患者の臨床統計的検討. 日口診誌 14: 75-79 2001.
- 2) 南 定, 飯田 順, 竹山 勇: 口腔底蜂窩織炎

- 14例に関する臨床的考察. 耳鼻臨床 48 ; 140-145 1991.
- 3) 米田和典, 齋藤琢磨, 山本哲也, 上田栄作ほか: 歯冠周囲炎を起した埋伏智歯に関する臨床的検討. 日口診誌 12 ; 314-322 1999.

著者への連絡先: 菅野勝也, (〒963-8611)郡山市富田町字三角堂31-1 奥羽大学歯学部口腔外科学講座  
Reprint requests : Katsuya KANNO, Department of Oral Surgery, Ohu University School of Dentistry 31-1 Misumido, Tomita, Koriyama, 963-8611, Japan